

さまざまな手法を見てみよう

記憶や思いを伝える方法はさまざま。ここでは、6つのキーワードとともに国内外の事例を紹介します。

遺構

土石流被災家屋保存公園
(日本／長崎県／1999年完成)

1992年に雲仙普賢岳の土石流災害では、被害にあった家屋を移設・保存し、道の駅に併設した。この地に起きた自然災害を知ることができる場所として、たくさん的人が訪れている。



人がつながる場所

みんなの家(日本／東北／2011年～)

東日本大震災後、人と人がゆるやかにつながる場所が各地に生まれた。建築家の伊東豊雄氏による「みんなの家」もそのひとつで、釜石をはじめ新しいまちの再生に向か、コミュニティを育むかけがえのない場所として定着している。

文化コンテンツ

絵本『てんでんこ一大津波伝説』
(日本／2012年発行：ひつじあかね著)

3.11の気付きを、地域に根付いた祭、民話、歌などで残そうとする動きもある。2012年に発行された大津波の伝説を語り継ぐこの絵本も、子どもと一緒に読んで語り継ぎたい内容をストーリーにして残している。

イベント

イベント

神戸ルミナリエ(日本／神戸市／1995年～)

阪神淡路大震災犠牲者への鎮魂とまちの再生の意を込めたイルミネーションのイベント。震災発生の年から毎年12月に行われており、2週間の期間中に400万人も的人が訪れる。



碑、モニュメント



ホロコースト記念碑(ドイツ／ベルリン／2005年完成)

17年の構想期間を経てベルリンの中心地に完成した、ナチスによって大量虐殺されたヨーロッパのユダヤ人犠牲者を慰靈するための大規模モニュメント。広大な敷地に約3千のコンクリート柱が立ち並ぶ独特の設計で、人類の犯した過ちを負の記憶として刻んでいる。

博物館・資料館



アチェ津波博物館(インドネシア／アチェ／2009年完成)

16万人以上が犠牲となったスマトラ島沖地震では、被害を語る博物館が、被害のひどかったインドネシアの都市・バタムアチェに震災から約5年後に開館した。現在は世界中から観光客が訪れている。

デジタル技術



DARK TOURISM SENDAI(ダークツーリズム仙台)
(日本／宮城県／2013年～)

語り部やガイドによる宮城県内の被災地ツアーを収録したアプリ「ダークツーリズム仙台」は、GPSの位置情報で語り部音声の再生コントロールし、被災地との距離に応じてより詳細なエピソードが聞ける。また、石巻の「つなぐ館」ではAR技術を利用した防災プログラムを実施するなど、注目が集まる分野だ。

「手法」編

どのように伝え、活かすのか

私たち人類はこれまで多くの自然災害や戦争などを経験してきました。そして、そこから得た悲しみや気付きをいろいろな形で継承してきました。ここではさまざまな手法を参考に、そこに込めるべき意味についても考えてていきます。

記憶の承継手法

ダークツーリズムとは何か

自然災害をはじめとして、我々は悲しみの記憶をどのように次世代に受け継いでいくのでしょうか。それにはいろいろな方法が考えられます。例えば、阪神・淡路大震災の悲劇を承継するために年末に開催されている神戸ルミナリエは、すっかり神戸の風物詩になり、まるでお盆の送り火のように亡くなれた人を厳かに弔います。こうしたイベントで、悲しみを忘れないという手法も大切でしょう。また、東日本大震災の被災地は、古来から津波の多いところになりました。この地域では、津波が来たらまず自分で高台に逃げるべきだという考え方方が息づいており、この「津波てんでんこ」の考え方は、近年物語としても取り上げられています。もちろん、博物館を建てて、記憶を残すとともに教訓を学ぶということも大切だと思います。さらに最近では、AR(拡張現実)と呼ばれる新しいデジタル技術を用いて、スマートホンで被災直後の写真を見られるようになってきています。考えてみると、記憶の承継手法はこのように多岐にわたるのですが、遺構の保存は非常に大きなインパクトを持ちます。原爆ドームの前に立った時、それが来訪者に語りかけてくる力に圧倒された経験がある人も多いかと思います。

遺構の保存に関しては、誰もが諸手を上げて賛成といつわではなく、引っ掛かりを感じる人も多いかもしれません。しかし、悲しみの記憶はあるものの、それを化体した遺構がない地域では、なかなかその悲しみは承継されてしまふことがあります。特に亡くなられた方が多い場であれば、その記憶を確かなものにするために、遺構の保存は積極的に検討されてよいかと思

います。

これまで述べたイベント、伝承、博物館、ARそして遺構の保存は相互に排他的なものではなく、それぞれが補完しあうことで悲しみの記憶をより確かに受け継いでくれることであります。そして、地域と結びついた悲しみは、その地を誰かが訪れることによって周囲に伝播していきます。戦争や災害、そして事故の現場などでは「ダークツーリズム」と呼ばれ、一般的に知られた概念です。広く悲しみの地を訪れる旅は海外で海外と悼みや悲しみを共有し、承継していくために、この言葉が持つ力を感じていただければと思います。単なるレジャーとしての観光ではなく、悲しみを承継する旅、それがダークツーリズムなのです。

観光学者／追手門学院大学経営学部准教授 井出明(いで・あきら)

記憶の承継手法と ダークツーリズム

が、遺構の保存に関しては、誰もが諸手を上げて賛成といつわではなく、引っ掛かりを感じる人も多いかもしれません。しかし、悲しみの記憶はあるものの、それを化体した遺構がない地域では、なかなかその悲しみは承継されてしまふことがあります。特に亡くなられた方が多い場であれば、その記憶を確かなものにするために、遺構の保存は積極的に検討されてよいかと思

います。社会情報学とダークツーリズムの手法を用いて、東日本大震災後の観光の現状と復興に関する研究を行なう。共著に「観光とまちづくり—地域を活かす新しい視点」他

井出明(いで・あきら)

りー地域を活かす新しい視点」他

なんのために 残すのか・伝えるのか、考えてみよう

3.11以降を生きる世代へ

残していきたいこと、語り継ぎたいもの、
そしてその意味と意義について考えてみましょう。



未来へ
つなげよう

陸前高田の一本松のような
再生の象徴は
まちのシンボルになります



地域で起こった災害を知ること
そして人々がどのように
適応しようとしてきたのか



亡くなった人々の魂を鎮め、
手をあわせる場所が
いま各地域でもっとも
必要とされています



必ずまた来る地震や津波
その被害を
最小限にするために

これからまちづくりや
暮らしの再生に
活かしていきたいことって
なんだろう?



地域文化の継承
固有の暮らしのありかたや
人と人のつながりは、
再生にもっとも必要な
要素のひとつ



地域の活性化
外からやってくる人に
震災の記録を伝えるため
地域に人を呼び、
にぎわいをつくるために



まちの歴史
まちのあゆみを
振り返ることは
あたらしいまちづくりに
必須です



6月初旬、解体がはじまった大槌町の旧役場庁舎。

議論では次のような重要な意
見も上げられている。
「伝承を後世につたえるというこ
とが分かった。

炙りだされる
まちのあゆみ

反する意見の中に共通する想い
を取り出していった。するとそこ
には「鎮魂の場所の必要性」や
「後世への伝承・防災教育の重要
性」といった共通の論点があるこ
とが分かった。

検討委員会の委員長を務めた
岩手県立大学総合政策学部
教授の豊島正幸さんは、当時の
心境をこう語る。豊島さんは相
互に「解体を願う人、保存を願う人、
それぞれの意見を聞くたびに気
持ちが揺れました。どちらにも尊
い分がありどちらの思いも尊重すべきものでした」。

それぞれの意見を聞くたびに気
持ちが揺れました。どちらにも尊
い分がありどちらの思いも尊重
すべきものでした。

「もの」から「場所」へ

解体について多角的に検討する
場として町民、職員、遺族、職員か
ら寄せられた意見や提言をふま
えつつ、全3回にわたる議論を重
ねた。さまざまな意見を取り入
れるという姿勢は、委員会のメン
バーが議員や職員、遺族以外に、高
校生や伝承文化の専門家といっ
た立場と世代の異なる人々で構
成されていることにも表れている。

「解体を願う人、保存を願う人、
どちらにも尊い分がありどちらの
意見を聞くたびに気持ちが揺れま
した」と豊島さんは語る。豊島さんは、
解体か保存か、平行のまま
だった議論が動いたのは2回目
の会合のときだった。

豊島さんは、「今、子供が遊ぶ場所が
ないので、旧役場庁舎の敷地を公園にして
もらいたい」と発言で、議論は庁
舎(もの)から敷地(場所)の在り
方へと展開した。

委員会のメンバーである高校
生によるこの発言で、議論は庁
舎(もの)から敷地(場所)の在り
方へと展開した。

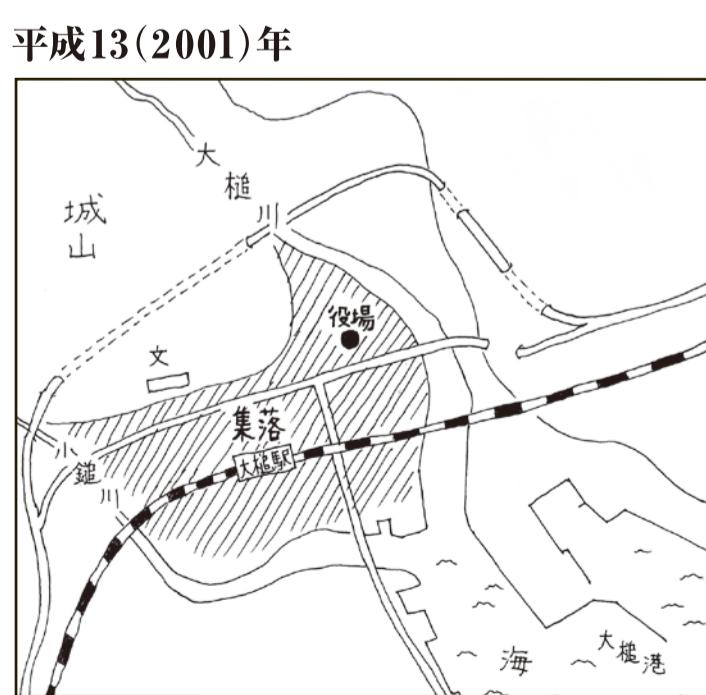
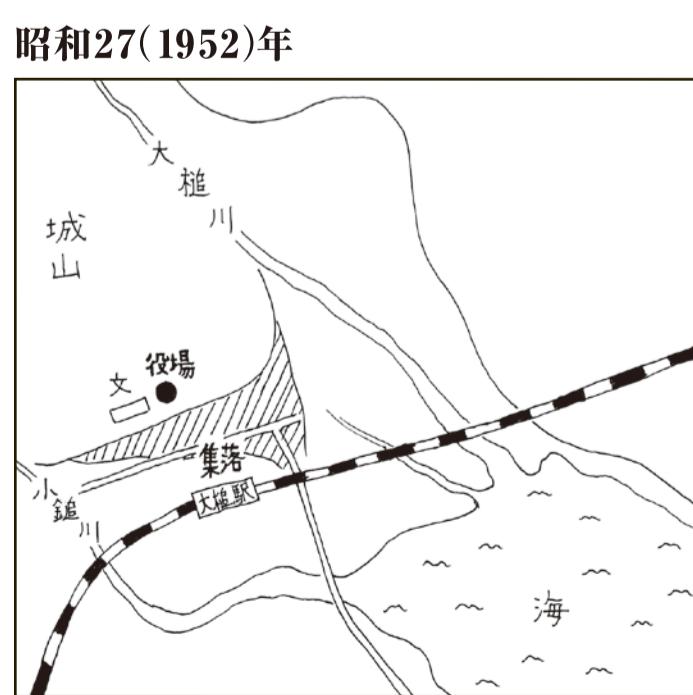
「もの」から「場所」へ視点を移
したとき、ひとつの疑問が生まれ
る。そもそもまちの中核機能を
担う役場がなぜ洪水や津波のり
スクが高いこの場所にあったのだ
ろうか?

炙りだされる
まちのあゆみ

旧役場庁舎は現在、その一部
を保存する方針で検討が進んで
おり、今年6月初旬に取り壊し
工事がはじまりました。旧役場の跡地
は盛り土されずにそのまま残
ることが決定している。町は犠牲
になった人々の人柄を記録する
「生きた証プロジェクト」を始動。

この秋にも遺族への聞き取りが
はじまる。また旧役場の建物が
専門家らによって「デジタルモニタ
メント(遺跡の3D画像をデジタ
ル保存する技術)」として保存さ
れるなど、新しい分野からの動
きも期待されている。

地図で見る大槌町のあゆみ



2つの時代の地図を見比べると、役場が山裾から海側に移動し、集落が拡大していることがわかる。また、海を埋め立て大槌港ができる。防潮堤ができたのもこの頃だ。(大槌町役場校舎は2014年7月現在、旧大槌小学校を仮庁舎としています)

「意味」編

対話からはじまる「語るべき物語」

大津波とそれによって引き起
こされた火災で壊滅的な被害を
受けた岩手県大槌町。海の傍に
倒壊した建物が止まない余震
の前にテントを張り対策本部を
立てた。結果、当時の町長や町職
員40名が命を落とし、行政機能
が麻痺するという事態に陥った。

2012年10月大槌町は「大
槌町旧役場庁舎検討委員会」を
設置。旧役場庁舎の保存または
解体について多角的に検討する
場として町民、職員、遺族、職員か
ら寄せられた意見や提言をふま
えつつ、全3回にわたる議論を重
ねた。さまざまな意見を取り入
れるという姿勢は、委員会のメン
バーが議員や職員、遺族以外に、高
校生や伝承文化の専門家といっ
た立場と世代の異なる人々で構
成されていることにも表れている。

豊島さんは、「今、子供が遊ぶ場所が
ないので、旧役場庁舎の敷地を公園にして
もらいたい」と発言で、議論は庁
舎(もの)から敷地(場所)の在り
方へと展開した。

豊島さんは、「今、子供が遊ぶ場所が
ないので、旧役場庁舎の敷地を公園にして
もらいたい」と発言で、議論は庁
舎(もの)から敷地(場所)の在り
方へと展開した。

炙りだされる
まちのあゆみ

豊島さんは最後の報告書でこ
とこの意義はとても大きいと
うまとめている。

各地域で活動する人やプロジェクトを
焦点をあて、そこから生まれる新しい
「つながり」の可能性に向けて。



中学生たちが取り組む1000年後の命を守る活動 その1 いのちの石碑プロジェクト

町にある全21の浜の、津波が襲って来た高さの地點に石碑を建てるプロジェクト。「1000年後の命を守りたい」という思いで、宮城県女川町の中学生たちが考案した。町外で募った「100円募金」で5万円の資金を集め、これまでに5基の石碑を設置した。全ての人の命を守ることができると町ができるまでプロジェクトは続く。
<http://www.inotinosekihi.com/>



3.11を伝える、 活かす輪

各地でさまざまな活動が始まっています。風化と闘う拠点となる「場所」、「活動」、新たな「デジタル」技術の活用、現地をめぐる「ツアー」の4つのカテゴリで紹介します。

震災の記憶を伝える公園 震災メモリアルパーク中の浜

震災後に海岸が望める緑豊かなキャンプ場だったエリアを、自然の脅威や震災の記憶を後世に伝える公園として整備した。被災した下灘・秋田場事場を震災遺構として保存しているほか、上に立つと津波と同じ高さの丘になる「展望の丘」などがある。公園周辺の林の中には、この場所の津波の海上高21.3mを示す目印があり、見上げる立派な津波の高さを体感できる。



ホテルスタッフが被災エリアを案内 語り部バス

震災直後からボランティアとして住むとともに日々を歩いてきた南三陸ホテル観光が運営するバスツアー。ホテルスタッフが語り部となり町を案内する。宿泊者限定期間は朝8時45分より運行、大人500円、子供250円。



石巻にできた震災伝承スペース つなぐ館

宮城県石巻市中心市街地に2014年4月にオープンした震災伝承展示スペース。AR(拡張現実)技術を利用したタブレット端末向けアプリを導入して「防災もあきらめない」や、「震災の語り部」プログラムなど拠点として、そして地域の人たちが集う場所として、記憶の伝承と防災について考える場を目指す。月・日休館 11:00~17:00(入館料無料)



膨大なデジタルデータを一元検索 東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」

5年で急速に失われるとされる震災の記憶を残すべく、国立国会図書館が官民の様々な機関と連携し取り組む大規模デジタルアーカイブ。東日本大震災に関する音声・動画・写真・ウェブ情報などのデジタルデータを閲覧する文書情報資料約466万件(平成26年5月末現在)を一元的に検索・活用できる。



デジタルで人と人をつなぐ 未来へのキオク

グーグルが提供するインターネットで記録を共有するサイト。ひとりひとりの震災の体験談が被災地の過去・現在の写真や映像、ストリーミングといいたた「キオク」を集め、お互いに共有することで人と人がつながっていくことができる。

【グーグル株式会社】
<http://www.miraikioku.com/>

リアス・アーク美術館 「東日本大震災の記録と津波の災害史」展



現代美術を紹介しながら地域に関する歴史民族的な常設展も行う気仙沼のリアス・アーク美術館では、震災文化と捉え、震災前から津波に関する調査・研究・展示を行っていた。2013年4月からは、被災物155点、写真203点、歴史的資料137点を展示する常設展を実施している。月・火休館 9:30~17:00(入場料:一般300円)

【リアス・アーク美術館】
宮城県気仙沼市赤岩沢138-5 TEL 0226-24-1611 <http://www.riasisark.com/>

地域資源を再考 RE:プロジェクト

東日本大震災の津波で失われてしまった地域がそれぞれどんな場所で、そこにはどんな暮らしがあったのか、暮らしてきた方々の聞き取りから地域資源を開発見、再認識、再考するプロジェクト。集落ごとにまとめた冊子「RE:プロジェクト通信」の発行や、食文化の再現しながら味わう「モイドガハン」に取り組んでいる。

<http://re-project.sblo.jp/>

記憶を伝え、集う場所 開上の記憶

2012年4月、宮城県名取市開上にて津波復興祈念資料館・津波の儀式になった中学生14名の慰霊碑を守る社務所、震災の記憶と教訓を未来に語り伝える館内ガイドの拠点、地元元市民のお茶飲み場として、開館から2年間で3万人が来館している。月水木:10:00~15:00、土日祝:10:00~17:00(入館無料、案内ガイド等有料)

【認定NPO法人地域のステージ「開上の記憶」】
宮城県名取市開上庚申塚48-1(旧・開上中学校入り口)
TEL 022-385-2331 <http://tsunami-memorial.org/>

大津波の脅威と経験を伝える 大船渡津波伝承館

「あなたに助けてほしいから」を運営の方針に掲げ、2013年に開館。大津波の脅威と経験を映像や講話を通じて震災へ伝える。館長自ら撮影した震災の津波の映像を視聴し、命の大切さ、そして、防災について学ぶことができる。来館希望者は日程までの予約申込みが必要。(高校生以上)300円

岩手県大船渡市赤崎町宮野5-1 TEL 0192-47-4408 <http://olunato-tsunami-denshikan.jimdo.com/>

思いや教訓を千年後の子供たちへ 千年希望の丘



津災の考え方を基本にまちづくりを進め宮城県岩沼市は、被災した沿岸部一帯に、再生可能なガレキ再生資材を活用して丘を築造した。また植樹することで津波の威力を減衰・分散させるとともに、一次避難場所や震災の記憶・教訓を後世に伝える防災教育の場などとして整備していく。平成26年5月31日に開催した「第2回千年希望の丘植樹祭2014」では、約7千人の参加者により約7万本の植樹を行った。

【沼田市建設部 復興・都市整備課公園総合係】 TEL 0223-22-1111(内線247)

津波到達ラインを桜で示す 桜ライン311

東日本大震災を後世に伝えるために、陸前高田市内約170kmに及ぶ津波の到達ラインに10mおきに桜を植樹するプロジェクト。これまでに169ヶ所で718本の桜が植樹された。風雲、記憶の伝承、減災の活動をして、そしてその桜が後世にまちの記憶となることを目指す。今年3月にはその活動がサッパメントリートとして映像で上映され、講演を行っている。

【国立国会図書館 電子情報部国文図書室 東日本大震災アーカイブ担当】
TEL 03-3581-2331 <http://knndl.go.jp/>

三陸ジオパーク サッパ船ツアー

東日本大震災で失った街 模型復元プロジェクト

学生による地域交流・体験型ツアー 福島を五感で体験するツアー

「福島の現状を見て体験することで、福島への关心を深めてほしい」という想いをもとにした福島大学の学生らが主催する福島のタビツアーフー。自分の目で実際にないど分かるないこと、メディアを通してでは感じることのできないこと、地元の人々と直接交流する機会に触れることがで、福島が抱える現状や課題、そして将来について考えられる機会をつく。

【タバフプロジェクト】 <http://sutahuku.jimdo.com/>

津波の脅威を疑似体験 唐桑半島ビジターセンター 津波体験館

地盤の自然と人間との関わりを伝える唐桑半島ビジターセンターは1984年に開館した日本ではじめての津波体験館がある。ここでは、この地域に馴染み深い大津波をストーリー化した映像とともに、座席が揺れるなど臨場のある演出で津波の恐ろしさを伝えている。2013年よりニューアルオープン。

火体験: 8:30~16:30(津波体験館入場料: 大人380円)
【唐桑半島ビジターセンター】
宮城県気仙沼市唐桑町崎原4-3 TEL 0226-22-3029 <http://www.karakawa.com/visiter/>

「大地の公園」で 地球との関わり方を知る、 三陸ジオパーク

ジオパークとは、地殻や山や川と親しむことで、五億年前から現在までのジオ(地球)の変遷立ちとくみに気付き、人間と自然の関わり方を考える場所です。世界中であり、日本では長崎の島原半島をはじめ33の地域がジオパークに認定されています。2ページで紹介している「土石流被災家屋保存公園」も島原半島ジオパークのポイントの一つです。

東日本大震災後、2013年3月に、八戸から気仙沼までの十六市町村が「三陸ジオパーク」に認定されました。その範囲は、南北約220km、東西約80km、海岸線約300kmにも及びます。三陸ジオパークは、折石(気仙沼)、北山崎(田野畠村)、龍泉洞(岩泉町)といった五億年の地殻変動がつくり出したダイナミックな見どころとともに、津波の脅威と教訓を伝える要素として「田老の防潮堤」「高田松原の一本松」など、29ヶ所の震災遺構がポイントに含まれています。自然の脅威を実物のスケールで感じながら、今回の震災の教訓が活かされた現在進行形の防災・減災のまちづくりを見に行ける場所として、修学旅行や研修先として人気が高まっています。

【三陸ジオパーク推進協議会】
TEL 0193-64-1230 <http://sanriku-geo.com/>

わわの写真 vol.2

再び輝き出す、街の「宝物」

3年目の陸前高田

2011年3月11日。あまりにも大きな悲しみが、東北を、そして日本中を覆った。海外取材中だった私が帰国後、真っ先に足を運んだのは、岩手県の沿岸の街の中でも最も南に位置している、陸前高田市だった。後に家族となる人の両親

が、この街で暮らしていたからだ。圧倒的に破壊されてしまった街を、ただ茫然と見つめた、寒空の3月。

ここでシャッターを切っても、瓦礫がどけられるわけではない。人のお腹を満たせるわけでもない。写真に出来ることなど、あるのだろうか。何を伝えればいいのか、何を残していくべきなのか、全く分からなくなっていた。

それから3年が経った。目まぐるしく変わっていく風景とは裏腹に、声にさえならない悲しみは置き去りになったままだ。続く仮設住宅での暮らし、進まない高台移

転、乗り越えていかなければならないものもきっと数えきれない。けれども同時に、人々の営みも少しずつ息を吹き返しつつある。海の幸や祭、震災前からこの街を支えてきた宝物が、また一つ、また一つと取り戻されようとしている。

今、この街で、少しでも多くシャッターを切りたいと思う。それは次の世代が同じ悲劇に巻き込まれないための記録であり、そしてこの街で再び輝こうとしているものを少しでも多くの人と共有したいという、願いそのものもある。何よりもここで出会った方々への感謝を込めて、これからも向き合い続けたい。



春休みに水揚げを手伝う小さな漁師たち(2012.4)



大漁の第一くろさき丸にはいつもウミネコたちが追いかけてくる(2013.7)



仮テントでは種牡蠣の間引き作業が続く(2012.5)



日が暮れ、真っ暗だった大野湾の水平線を漁火がゆらゆらと照らしはじめる(2012.12)

写真・文：安田菜津紀（やすだ・なつき）

1987年神奈川県生まれ。studio AFTERMODE所属フォトジャーナリスト。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。

現地が桜で満開になつたら
きれいなだろうなあ
と未来への想像を
しながら絵を
書いていました。(遠藤)

はじめましてですが、とても
楽しめました。
東京のうだる暑さを
乗り切ろうと思います。(西山)

夏になると無性に
行きたくなる
三陸の海。
今年はテントを
積んで行きたいです。(高村)

この秋、私の故郷で
「大館北秋田芸術祭2014
『里に犬、山に熊』」
を開催します。
是非遊びにきてください。
<http://inukuma.jp/>(中村)

編集後記

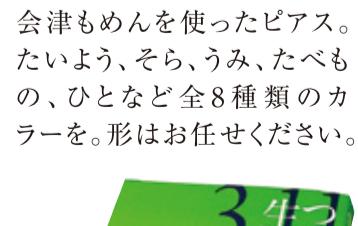
【読者プレゼント】プレゼントをご希望の方は、応募用紙にご記入いただき、ハガキまたはメール、FAXにてお送りください。
*締切は10月31日(金)【必着】とさせていただきます。*プレゼントの当選は発送をもってかえさせていただきます。
*プレゼント品は被災地で生まれた手仕事やご当地名物などを中心に、わわプロジェクトが直接買い付けてお届けしています。

①吟醸酒「一本松」
<5名様>

岩手県の酒造「酔仙」から、陸前高田の復興のシンボル「奇跡の一本松」をモチーフにした期間限定の吟醸酒。

②山元ストロベリータイム
エコたわし<5名様>

宮城県山元町のまちのシンボル
いちごのたわし。洗剤いららずでキレイに!
仮設住宅に住むお母さんたちがつくっています。

③ふくいろピアス
<8名様>

会津もめんを使ったピアス。
たいよう、そら、うみ、たべもの、ひとなど全8種類のカラーを。形はお任せください。

④書籍「つくることが生きること」
<10名様>

被災エリアで活動する16人の「復興リーダー」のインタビューと、アーティストやクリエイターによる70組の支援活動を紹介。

【ハガキで】応募用紙をハガキに貼り、以下の住所までお送りください。
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-1
わわプロジェクト「わわ新聞12号 プレゼント」係

【FAXで】応募用紙を **03-3518-9102**までお送りください。

【メールで】応募用紙内の項目をメール本文にご記入いただき **info@wawa.or.jp** までお送りください。

プレゼント応募用紙【ご記入欄】

12

●住所: _____ 年齢 _____

●氏名: _____

●電話番号: _____

●希望するプレゼント(いずれかに○をつけてください)
① / ② / ③ / ④

●『わわ新聞』をお読みになった感想

●『わわ新聞』入手した場所

●『わわ新聞』で今後取りあげてほしいこと

赤い羽根・災害ボランティアNPO活動サポート募金助成事業
わわプロジェクトの活動は、平成24年4月より中外製薬株式会社の支援を受けています。
次号の発行は10月(予定)です。
わわ新聞はウェブサイトからダウンロードできます。<http://www.wawa.or.jp/wawapaper/>

発行元／わわプロジェクト
一般社団法人非営利芸術活動団体コマントン
発行人／中村政人
東京都千代田区神田錦町2-1
TEL／03-3518-9101
FAX／03-3518-9102
メール／info@wawa.or.jp
ウエブサイト／<http://www.wawa.or.jp>
編集ライター／高村陽子
デザイナー／ニシマリカ
写真P1／小澤房子
イラスト／遠藤麻衣
印刷／株式会社北鹿新聞社

福島県 A・Sさん
震災のあの日から、どんな思いで過ごしてきたか、苦しみの中でも亡くなった人を思い、その人達の分までがんばってきた人の気持ちが手にとるようだった。また、たくさん的人々に支えられているということを実感した。

福島県 A・Mさん
今だに涙流れる、元気出ない…。読んで、自分だけじゃないな、無理して今元気出さなくて良いと思えた。

新潟県 A・Sさん
「うたうひと」が生まれるまでをかいた小野和子さんのお話に共感しました。目の前の人々をまず受け入れる。目の前の状況にチャンネルをあわせる。心を開いて受け取ることで本当にこたえることができる。聞く(聴く)ということはそうゆうことだと思います。

新潟県 S・Tさん
色々なものづくりがあり自分も何か作りたくなつた。サークルを捜そう!